

「塩狩峠」 (三浦綾子著)

主人公の永野信夫には実在のモデル(長野政雄)があって、この主人公は塩狩峠で犠牲の死を遂げた。

明治42年2月28日、この峠で連結器に故障を生じ、最後尾の客車が峠を逆走したのである。乗客の命を救うため、主人公永野信夫は、己が身を鉄路に投じてその客車を止め、全員の命を救った。

(p.182)

それはいったい何のゆえの相違だろうかと信夫は思った。

「そんなことはないよ、君の方がよっぽど君子だ」

「いや、ぼくには、君のような広やかさや、暖かさが無いよ。君は何とも言えない暖かいいいものを持っているよ」

「そうかなあ、だとしたら、それはふじ子のせいだよ。ぼくは小さい時から、ふじ子の足がかわいそうで、何よりも先にふじ子のことをしてやりたかった。菓子をもらってもふじ子にたくさんやりたくた。外を歩いても、ふじ子には道のいい所を歩かせたくなる。ぼくが何かを買ってもらっても、ふじ子が先に買ってもらったほうがうれしかったものだ。そんなふういつの間になくなってしまったんだな。君だって、万一妹さんが...待子さんと言ったっけ...体が不自由ならそうなるよ」

「そうかなあ」

自信なく信夫は答えた。

「そうだよ。考えてみると、永野君、今ふっと思いついたことだがね。世の病人や、不具者というのは、人の心をやさしくするために、特別にあるのじゃないかねえ」

吉川は目を輝かせた。吉川のいうことをよく飲みこめずに、信夫がげげんな顔をした。

「そうだよ、永野君、ぼくはたった今まで、ただ単にふじ子を足の不自由な、かわいそうな者とだけ思っていたんだ。何でこんなふしあわせに生れついたんだろうと、ただただ、かわいそうに思っていたんだ。だが、ぼくたちは病気で苦しんでいる人を見ると、ああかわいそうだなあ、何とかして苦しみが和らがないものかと、同情するだろう。もしこの世に、病人や不具者がなかったら、人間は同情ということや、やさしい心をあまり持たずに終るのじゃないだろうか。ふじ子のあの足も、そう思って考えると、ぼくの間人形成に、ずいぶん大きな影響を与えていることになるような気がするね。病人や、不具者は、人間の心にやさしい思いを育てるために、特別の使命を負ってこの世に生れて来ているんじゃないだろうか」

吉川は熱して語った。

「なるほどねえ。そうかもしれない。だが、人間は君のように、弱い者に同情する者ばかりだとはいえないからねえ。長い病人がいると、早く死んでくれればいいとうちの者さえ心の中では思っているというからねえ」

「ああ、それは確かにあるな。ふじ子だって、小さい時から、足が悪いばかりに小さな子からもいじめられたり、今だって、さげすむような目で見えていく奴も多いからねえ」

紺がすりの袖から陽にやけた太い腕を見せて、吉川は腕組みをした。

茶の間の方から、待子たちの何か話す声が聞える。

「うん、そうか」

吉川が大きくうなずいた。

「じゃ、こういうことはいえないか。ふじ子たちのようなのは、この世の人間の試金石のようなものではないか。どの人間も、全く優劣がなく、能力も容貌も、体力も体格も同じだったとしたら、自分自身がどんな人間かなかなかわかりはしない。しかし、ここにひとりの病人がいるとする。甲はそれを見てやさしい心がひき出され、乙にそれを見て冷酷な心になるとする。ここで明らかに人間は分けられてしまう。ということにはならないだろうか」

吉川は考え深そうな目で、信夫の顔をのぞきこむようにみた。信夫は深くうなずいた。うなずきながら、自分がきょう感じたバラの美しさを思い出していた。

(p.234)

「悪しき者に手向うな、人もし汝の右の頬を打たば、左をも向けよ。汝を訴えて下着を取らんとする者には、上着をも取らせよ」

この言葉が、信夫の目をひいた。それはまことにふしぎな言葉であった。小さい時信夫はよく祖母のトセに言われたものである。

「信夫、男の子という者は、ひとつなぐられたら、ふたつなぐり返してやるのですよ。三つなぐられたら、六つなぐってやるものです。それでなければ男とは言えません」

何と、その言葉と聖書の言葉とはちがうことだろうと、信夫は驚いた。

(なぐり返すことよりも、なぐり返さぬことの方が、男らしいことだろうか)

信夫は目をつむって考えてみた。だれかが自分の頬をひとつなぐる。何をとばかりにこっちは二つなぐり返す。そしてまた別の自分は、頬をひとつなぐられる。悠然と微笑して、もうひとつの頬をいきり立つ相手の頬に向ける。はたしてどちらの自分になりたいかと、信夫は自分自身に問うてみた。信夫はそう自問した時、自分が祖母に受けたしつけや、その影督を受けた考え方が、いかに薄手なものであるかに気がついた。

(それにしても、なぐられてもなぐり返さず、下着を取ろうとする者に、上着までくれてやるとは、悪人をただ甘やかすことではないだろうか)

深い教えのようでいて、その辺がどうもわからない。だが信夫は、この聖書の中に、自分の考えとは全くちがった考え方が、たくさんあるのを認めないわけにはいかなかった。つづいてすぐに、

「汝らの仇を愛し、汝らを買むる者のために祈れ」という言葉があった。この言葉にいたっては、信夫は、日本人の感情と全く相容れないものを感じた。日本人は仇討ち物語が好きである。もし、赤穂の浪士四十七人が、この聖書の言葉を守ったとしたらどうだろうと、信夫はまじめになって考えた。浅野内匠守の無念は、あの吉良の首を上げなければ晴れないものであったはずである。

あの四十七人が、吉良上野介を許し、しかも愛し、その者のために安泰を祈るとしたなら、世間は決して、四十七士を許さなかったにちがいない。武士の世界では、仇討ちは大いなる美拳であったはずだ。このイエスという男は、自分の父が殺され、殿様が殺されても、その仇を討たないのだろうか。その仇を愛することができるのだろうか。何という妙な人間だろうと、信夫は思った。

(p.250)

見かけによらず、三堀は強情だった。当の本人があやまるといわないのに、首に縄をつけて和倉の家に連れていくわけにもいかなかった。信夫は、キュッキュッと鳴る雪の道を歩きながら、駅前通りに出た。暮れもおし迫って、人通りもいつもよりにぎやかである。馬櫓がリンリン鈴を鳴らしながら、いく台も通る。赤煉瓦で有名な興農社の所までくると、何か大声が聞えた。みると、一人の男が外套も着ないで、大声で叫んでいる。だれも耳をかたむける者はない。

信夫は、ふと耳にはいった言葉にひかれて立ちどまった。

「人間という者は、皆さん、いったいどんな者でありますか。まず人間とは、自分をだれよりもかわいいと思う者であります」

寒気の強い午後だ。年のころ三十ぐらいか、いや、三つ四つは過ぎているだろうか。その男が口をひらくたびに、言葉は白い水蒸気となってしまう。足をとめた信夫をみて、その男は一段と声を大きくした。

「しかしみなさん、真に自分がかawaiiということとは、どんなことでありましようか。そのことを諸君は知らないのであります。真に自分がかawaiiとは、おのれのみにくさを憎むことであります。しかし、われわれは自分のみにくさを認めたくないものであります。たとえば、つまみぐいはいやしいとされておりましたも、自分がつまんで食べるぶんには、いやしいとは思わない。人の陰口ということは、男らしくないことだと知りながらも、おのれのいう悪口は正義のしからしむるところのように思うのであります。俗に、泥棒にも三分の理という諺がある

ではありませんか。人の物を盗んでおきながら、何の申しひらくところがありましよう。しかし泥棒には泥棒の言いぶんがあるのであります」

信夫は驚いて男をみた。男の澄んだ目が、信夫にまっすぐに注がれている。

(まるでこの人は、いまのおれの気持ちを見とおしてでもいるようだ)

信夫と男を半々にみながら、赤い角巻をまとった女や、大きな荷物を背負った店員などが、いそがしそうに過ぎていった。しかし、いま信夫は、自分がどこに立っているのかを忘れて、男の話にひきいれられていった。

(p.252)

「みなさん、しかしわたしは、たった一人、世にもばかな男を知っております。その男はイエス・キリストであります」

男はぐいと一歩信夫の方に近づいて叫んだ。

「イエス・キリストは、何ひとつ悪いことはなさらなかった。生れつきの盲をなおし、生れつきの足なえをなおし、そして人々に、ほんとうの愛を教えたのであります。ほんとうの愛とは、どんなものか、みなさんおわかりですか」

信夫は、この男がキリスト教の伝道師であることを知った。男の声は朗々として張りがあったが、立ちどまっているのは、信夫だけである。

「みなさん、愛とは、自分の最も大事なものを人にやってしまうことであります。最も大事なものとは何でありますか。それは命ではありませんか。このイエス・キリストは、自分の命を吾々に下さったのであります。彼は決して罪を犯したまわなかった。人々は自分が悪いことをしながら、自分は悪くはないという者でありますのに、何ひとつ悪いことを

しなかつたイエス・キリストは、この世のすべての罪を背負って、十字架にかけられたのであります。彼は、自分は悪くないと言って逃げることはできたはずであります。しかし彼はそれをしなかつた。悪くない者が、悪い者の罪を背負う。悪い者が悪くないと言って逃げる。ここにハッキリと、神の子の姿と、罪人の姿があるのであります。しかもみなさん、十字架につけられた時、イエス・キリストは、その十字架の上で、かく祈りたもうたのであります。いいですかみなさん。十字架の上でイエス・キリストはおのれを十字架につけた者のために、かく祈ったのであります。

「父よ、彼らを許し給え、そのなす所を知らざればなり。父よ、彼らを許し給え、そのなす所を知らざればなり」

聞きましたか、みなさん。いま自分を刺し殺す者のために、許したまえと祈ることのできるこの人こそ、神の人格を所有するかたであると、わたしは思うのであります...」

突如として、伝道師の澄んだ目から涙が落ちた。信夫は身動きもできずに立っていた。「わたしはこの神なる人、イエス・キリストの愛を宣べ伝えんとして、東京からここにやってまいりました。十日間というもの、ここで叫びましたが、だれも耳を傾けませんでした」

彼は両手を胸に組んで祈り始めた。

「ああ在天の父なる神よ、大いなる恵みを感謝いたします。いまわが前に立てる小羊を主は見たまいりました。主よこの小羊をとらえたまえ。主よこの小羊を用いたまえ。わが唇の足らざるところを、主おん自ら訓したまえ。尊きみ子キリストの名によって、この祈りをおん前に捧げ奉る。アーメン」

大声でアーメンと叫んだ時、道を行くいく人かが笑った。

「ヤソだ」「ヤソの坊主だ」

聞こえよがしに言い捨てていく男もいる。だが伝道師は気にもとめずに信夫をみて、頭を下げた。そのとたん、信夫の耳をかすめて雪玉が飛んだ。ハッと思った瞬間、つづいて雪玉が信夫の肩に当たった。信夫はキツとしてふりかえった。

「痛かったですよ」

男は眉根を寄せて、信夫の肩に手をかけた。

「ひどいことをする」

(p.254)

信夫は怒ってあたりを見回した。すぐ横町をかけていく子供たちの姿が見えた。

その夜、信夫は興奮のあまり眠れなかつた。伝道師は伊木一馬と言った。信夫は伊木一馬をともなって自分の下宿に来た。そこで信夫は言った。「先生、ぼくは、先生のお話をうかがって、イエスが神であると心から思いました。いや、この人が神でなければ、だれが神かと思いました」

信夫は、真実心の底からそう思った。子供の投げた雪つぶてが、自分の肩を強く打った時、思わず信夫は怒りに満ちてうしろをふりかえった。そして初めて、十字架の上でイエスが言ったという、「父よ、彼らを許し給え、そのなす所を知らざればなり」の言葉が、痛いほど身にしみた。全くの話、子供は何もわからずに、ただおもしろ半分には雪つぶてを投げたのだ。だが、もしま近にいたとしたら、自分は果して子供たちを許したことだろうか、信夫は思った。彼らをつかまえて問いつめ、あるいはゲソコツのひとつもくれてやったことだろう。

しかしイエスは、いままさに殺されんとする苦しみの中にあって、殺す者共を憐れんだのだ。

もしこれが神の人格でないとしたら、どれが神の人格といえようと、信夫はいたく感動した。

このイエスは、マタイ伝の中で、「汝の敵を愛せよ」と言っている。その数えのごとく、敵を愛して死ぬことのできたイエスを思うと、信夫はだまされてもいいから、このイエスの言葉に従って生きたいと、痛切に感じた。

「では、永野君、君はイエスを神の子だと信ずるのですか」

「信じます」

キッパリと信夫は言った。

「では、あなたはキリストに従って一生を暮すつもりですか」

「暮すつもりです」

「しかし、人の前で、自分はキリストの弟子だということができますか」

伊木一馬はゆっくりとたずねた。

「言えると思います」

信夫はたじろがなかった。

「しかしね、いま聞いたばかりで、すぐにイエスを信ずることができますか」

「ぼくは、ぼくの父も母も妹も、妹の夫も、そして...ぼくの未来の妻も、みんな信者です。ずいぶん前から、ぼくはキリスト教に関心は持っていたのです」

しかしその関心には、たぶんに反感がふくまれていた。特に、キリスト教が外国の宗教だということに、信夫は強い抵抗を感じていたのであった。だが先日、ふじ子がこんなことを言った。

「お先祖様を大事にするということは、お仏壇の前で手を合わせることだけではないと思うの。お先祖様がみて喜んでくださるような毎日を送ることができたら、それがほんとうのお先祖様への供養だと思うの」

この言葉が、信夫の心の中にあつた。そんなことも、信夫は伊木一馬に語った。

「すると、君の心は、ずいぶん昔からキリストを求めていたわけですね」

一馬はやっと、信夫の告白にうなづくことができたようであった。

(p.256)

パチパチとストーブの中で火が爆ぜていた。

「そうですか。では、もう一度質問しなおしますがねえ。永野君、君はイエスを神の子と信ずると言いましたね。そして、キリストに従って一生暮すと言いましたね。人の前でキリストの弟子だということもできると言いましたね」

信夫はハッキリとうなずいた。

「しかしね。君はひとつ忘れていることがある。君はなぜイエスが十字架にかかったかを知っていますか」

信夫はちょっとためらってから、

「先ほど先生は、この世のすべての罪を背負って十字架にかかられたと申されましたが...」

「そうです。そのとおりです。しかし永野君、キリストが君のために十字架にかかったということ、いや、十字架につけたのはあなた自身だということ、わかっていますか」

伊木一馬の目は鋭かった。

「とんでもない。ぼくは、キリストを十字架になんかつけた覚えはありません」
大きく手をふった信夫をみて、伊木一馬はニヤリと笑った。

「それじゃ、君はキリストと何の縁もない人間ですよ」

その言葉が信夫にはわからなかった。

「先生、ぼくは明治の御代の人間です。キリストがはりつけにされたのは、千何百年も前のことではありませんか。どうして明治生れのぼくが、キリストを十字架にかけたなどと思えるでしょうか」

「そうです。永野君のように考えるのが、普通の考え方ですよ。しかしね、わたしはちがう。何の罪もないイエス・キリストを十字架につけたのは、この自分だと思えます。これはね永野君、罪という問題を、自分の問題として知らなければ、わかりようのない問題なんですよ。君は自分を罪深い人間だと思えますか」

正直言って、信夫は自分をまじめな部類の人間だと思っている。性的な思いにとらわれた時は、自分自身でも罪の深い人間に思うことはある。しかし、こうして他人から問われると、さほど罪深いような気はしない。

「そのへんのところが、ぼくにはよくわからないのです。ぼくは自分が特別に罪深い人間だとは思っていないのですが…。聖書に、色情を抱いて女をみる者は、すでに姦淫した者だという言葉を読んで、これはずいぶん高等な倫理だと思いました。そして、あの義人なし一人だになし、という言葉が、ぼくなりにはわかったような気はしているんです。でも、いま先生に、自分を罪深いかといわれると、ハッキリとうなずくほどの、罪意識は持っていないように思うのです」

伊木一馬は、いく度か大きくうなずきながら聞いていたが、ふところから聖書を出した。

「わかりました。永野君、これはぼくも試みたことなんだが、君もやってみないかね。聖書の中のどれでもいい、ひとつ徹底的に実行してみませんか。徹底的にだよ、君。そうするとね、あるべき人間の姿に、いかに自分が遠いものであるかを知るんじゃないのかな。わたしは、『汝に乞う者に与え、借らんとする者を拒むな』という言葉を守ろうとして、十日目にかぶとを脱いだよ。君は君の実行しようとするを、見つけてみるんだね」

伊木一馬は、夕食を食べ、そして帰って行った。その一馬の数々の言葉を思いながら、信夫は、一夜ほとんど眠ることができなかった。

隣人となったサマリア人の話

よし、おれはこの聖書の言葉に従って、とことんまで彼の立派な隣人となってみせよう。
(と決意する)

(遺言状)

葬儀は三月二日、旭川の教会においてとり行われた。会衆は会堂の外にまで溢れ、その中には信夫を募って泣く日曜学校の生徒の可憐な姿もあった。司会者が信夫の遺言状を読みあげた。その遺書は、入信以来新年毎に書きあらため、信夫が肌身離さず持っていた遺言状であった。血糊がべっとりとついていたありさまを司会者は語った後、その遺言状は読みあげられた。

遺言

- 一、余は感謝して凡てを神に捧ぐ。
- 一、余が大罪は、イエス君に贖はれたり。諸兄姉よ、余の罪の大小となく凡てを免されんことを。余は、諸兄姉が余の永眠によりて天父に近づき、感謝の真義を味ははれんことを祈る。
- 一、母や親族を待たずして、二十四時間を経ば葬られたし。
- 一、吾家の歴史（日記帳）その他余が筆記せしもの及信書（葉書共）は之を焼棄のこと。
- 一、火葬となし可及的虚礼の儀を廃し、之に対する時間と費用とは最も経済的たるを要す。湯灌の如き無益なり、廃すべし。履歴の朗読、儀式的所感の如き之を廃すること。
- 一、苦楽生死、均しく感謝。

余が永眠せし時は、恐縮ながらここに認めある通り宜しく願上候 頓首
永野 信夫

愛兄姉各位

遺言状が読みあげられると、全会衆のすすり泣く声が会堂に満ちた。

柩が会堂を出た時、人々はそれを担おうとして吾先にと駆けよつた。郊外の墓地まで担って行こうというのである。その中に父を助けられた虎雄の姿があった。三堀も、吉川もその一部をかついでいた。大勢が担っているのだから、柩は軽かったが、その死は心にめりこむように重かった。

一カ月後に、信夫の遺言状と写真が、鉄道キリスト教青年会から絵葉書となって関係知人に配られ、更に多大の感銘を与えた。

吉川は三堀が言った言葉を思い出した。

「ぼくの見た永野さんの犠牲の死は、遺言状よりも何よりも、ぼくにとってずっと大きな遺言ですよ」

その後の三堀の人格の一変が、それを如実に物語っている。

(p.343)

ふじ子は、ふだん信夫が語っていた言葉を思った。

「ふじ子さん、薪は一本より二本のほうがよく燃えるでしょう。ぼくたちも、信仰の火を燃やすために一緒になるんですよ」

「ぼくは毎日を神と人のために生きたいと思う。いつまでも生きたいのは無論だが、いついかなる瞬間に命を召されても、喜んで死んで行けるようになりたいと思いますね」

「神のなさることは、常にその人に最もよいことなのですよ」

いまふじ子は、思い出す言葉のひとつひとつが、大きな重みを持って胸に迫るのを、あらためて感じた。それは信夫の命そのままの重さであった。

ふじ子は立ちどまった。このレールの上をずるずると客車が逆に走り始めた時、この地点に彼はまだ生きていたのだと思った。そう思うと言ひようのない気持ちだった。だが彼は、自分の命と引き代えに多くの命を救ったのだ。単に肉体のみならず、多くの魂をも救ったのだ。いま、旭川・札幌において、信仰ののろしが赤々とあがり、教会に緊張の気がみなぎっている。

自分もまた信仰を強められ、新たにされたふじ子は思った。ふじ子の佇んでいる線路の

傍に、澄んだ水が五月の陽に光り、うす紫のかたくりの花が、少し向うの木陰に咲きむれている。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにてあらん」

(あしがき)

昭和十四年、わたしたちの旭川六条教会月報に、当時の小川牧師はこう書いている。
「いまを去ること満三十年前、明治四十二年二月二十八日は、私共の忘れることのできぬ日であります。即ちキリストの忠僕長野政雄兄が、鉄道職員として、信仰を職務実行の上に現し、人命救助のため殉職の死を遂げられた日であります」 死後三十年と言えば、普通近親の者にも忘れ去られる年月ではないだろうか。長野政雄氏の死は、いかに後々まで多くの人に大きな感銘を与えたことであろう。

他教会から六条教会に転じたわたしが長野政雄氏のことを知ったのは、昭和三十九年七月初めのことであった。

同じ旭川六条教会の、現在八十九歳になられる藤原栄吉氏宅を訪問した際、氏はわたしに信仰の手記を見せてくださった。その中に、若き日の藤原氏を信仰に導いた長野政雄氏の生涯が書かれてあった。わたしは長野政雄氏の信仰のすばらしさに、叩きのめされたような気がした。深く激しい感動であった。

「そうか、こんな信仰の先輩が、わたしたちの教会に、現実に生きておられたのか」

わたしは、それ以来毎日長野政雄氏のことを思いつづけた。そして、小説の構想を考え、氏に関する資料を調べてみた。残念ながら資料は少なかった。氏の遺言により、その手紙や日記帳は一切焼却されたということだったし、血縁の人の行方もわからなかった。ただ僅かに、氏の死後発行された「故長野政雄君の略伝」という小冊子、氏の写真と、遺言の載っている記念の絵葉書が二枚、そして旭川六条教会史の氏に関する短い記録、及び追悼の言葉に過ぎなかった。

わたしの書いた「塩狩峠」の主人公永野信夫は、いうまでもなく小説の中の永野信夫であって、実在した長野政雄氏その人そのままではない。実在の長野政雄氏のほうが、はるかに信仰厚く、且つ立派な人であった。わたしはさらに、長野氏の人柄やエピソードを、先に述べた資料の中から少しく紹介して後記に代えようと思う。なぜなら長野政雄氏は、永野信夫の原型であるからである。

長野政雄氏は実に質素な人であった。

「庶務主任と言えば、相当の地位であったが、いつもみすばらしい風態をしておられた」

と、同じ下宿だったある信者が述懐しているとおりの、洋服などもほとんど新調しなかったらしい。

また非常に粗食で、弁当のお菜なども、大豆の煮たものを壺の中に入れておき、一週間でも十日でもその大豆ばかり食べていたという。というと、甚だ吝嗇に思われるかも知れないが、決してそうではなかった。氏は国元の母に生活費を送り、その外に教会には常に多額の献金をしていた。その献金額は、裕福な実業家信者よりも多かったときく。日露戦役の功により、金六十円を下賜された時、氏はこれをそっくりそのまま旭川キリスト教青年会の基本金に献じた。当時の六十円と言えば、いまのどれほどにあたるか、氏は決して金

を惜しんで質素だったのではない。

長野政雄氏の信仰に熱心だったことは、その教会の各集会のすべてに出席したという一事でもわかる。しかもその集会の往復には、計画的にその道を考え、必ず人々を教会に誘ったとのことである。

また、しばしば自費で各地に伝道し、鉄道キリスト教青年会を組織した。その話は火のように激しかったと伝えられる。

しかし氏は、教会にだけ熱心であったのではない。現場においても、氏はまことに優秀な職員であった。氏の在職中、運輸事務所長は幾度か変ったが、何れの所長にも、得難い人物として深く信頼された。

「ある所長の如きは、後任の所長に『旭川には長野といふクリスチャンの庶務主任あり。これに一任せば、余事顧慮するを要せず』とさへ言ひぬと伝えられたり」と、略伝の中に記されているのを見ても、その一端がうかがえる。

但し、単に上司にうけがよいというだけの人ではなかった。どんなに多忙でも、午後五時になれば部下を全部帰し、その残した仕事を深夜に至るまでも処理して怠らなかつたという。何しろ現代とちがい、超勤手当など一銭も出なかつた時代である。しかもそれが、ほとんど毎晩のことだったというから、これだけでも部下を心服させずにはおかなかつたのであろう。

氏はまた極めて温容の人であった。小説の中にも引用したが、略伝の言葉を再び引用しておこう。

「其の立ちて道を説くや猛烈熱誠、面色蒼白なるに朱を注ぎ、五尺の瘦躯より天来の響きを伝へぬ。然るに壇をくだれば、靄然（あいぜん）たる温容うたた敬慕に耐へざらしむ」

この長野政雄氏は、いかなる部下をもよく使いこなした。どこの職場にも、いわゆる余され者といわれる怠惰な、あるいは粗暴な者がいるものだが、長野政雄氏の所には、これら問題のある職員がいつも回されて来た。氏の所に送れば、すべて解決できるという定評になっていたためであった。氏の配下になると、その余され者たちはたちまちよく働くようになったというから、氏は確かに稀にみる人格の持主であったにちがいない。

特に次のエピソードは、わたしの心を強く打った。これは氏が札幌に勤務中の時の話である。

職場にAという酒乱の同僚があつた。彼は、同僚や上司からは無論のこと、親兄弟さえからも、甚だしく忌み嫌われていた。Aは益々酒を飲み、遂には発狂するに至つた。当然職を退かざるを得ない。

Aの親兄弟は病気の彼を見捨てた。ところが一人長野政雄氏は、親兄弟も顧みない狂人のAを、勤務の傍ら真心こめて看護し、彼に尽してやまなかつた。飲めばからみ、乱暴を働くだけのAを、氏は決して見捨てなかつた。しかも遂に全治するまで看護しつづけたのである。

全治するやいなや、長野氏は上司に対してAの復職を懇願した。これは小説の中の三堀の場合よりも、（この三堀の一件も、長野氏の体験をもとにして書いた）はるかに困難なことであつたろう。しかし長野氏のふだんがふだんである。上司も氏の人格と熱誠に打たれ、遂にこれを聞きいれ、その復職を認めた。氏は直ちに苗穂村に一軒の家を借り受け、Aと共に自炊生活を営み、その指導援助をつづけ、遂に全くAを立ち直らせたのである。略伝にはこれについて次のように書いてある。

「ともかく、子供よりも導くに困難なる友を、一身に引受けて教導訓育せるの美拳に至つ

ては、天父の愛を実行せる者にして、はじめて可能なるところにして、情に激して一時を救済する者などの到底なし得ざるところなり。ああ君は、かくの如くにして実行的信仰の階段を歩一歩昇り得て、遂に純金の生涯に達せられたるなり」

また、六条教会員の山内氏は語っている。

「君は愛の権化と言ひて可なり」と。

純金の生涯、愛の権化とまで、当時の友人たちが書き記さずにはいられなかった長野氏の日常生活は、実に想像に余りある。

氏はまた甚だ勇気の人でもあった。北海道の伝道に尽された宣教師ピアソン先生が、スパイの嫌疑を受けたことがあった。日露戦争前後の頃のことである。たちまち人々の反感と憎悪を買い、小学生までがピアソン先生の家を投石するという事態におちいった。

長野氏はこれを深く憂い、直ちに新聞に投書してピアソン先生の人格と使命を訴え、また警察に自ら出頭して誤解を解くために努め、奔走した。それが当時、いかに勇気のいることであったかは想像に難くない。

この長野政雄氏が、塩狩峠において犠牲の死を遂げたのである。鉄道、教会等の関係者はもちろんのこと、一般町民も氏の最後に心打たれ、感動してやまなかった。氏の殉職直後、旭川・札幌に信仰の一大のろしが上り、何十人もの人々が洗礼を受けた。藤原栄吉氏なども、感激のあまり、七十円の貯金を全部日曜学校のために捧げたという。

きょうもまた、塩狩峠を汽車は上り下りしていることであろう。氏の犠牲の死を遂げた場所を、人人は何も知らずに、旅を楽しんでいることだろう。だが、この「塩狩峠」の読者は、どうかあの峠を越える時、キリストの僕として忠実に生き、忠実に死んだ長野政雄氏を偲んでいただきたい。そして、氏が新年毎に書き改めては、肌身離さず持っていた遺言の、

「余は諸兄姉が、余の永眠によりて、天父（神）に近づき、感謝の真義を味わわれんことを祈る」

という一条を心をひそめて思い出していただきたい。

最後に、この小説を書くために何かとご配慮くださった藤原栄吉氏、草地カツ姉、祈りをもって励ましてくださった教会内外の諸兄姉、二年半にわたる小説連載中、数々のご協力をいただいた「信徒の友」編集部の方々、挿絵を描いてくださった中西清治兄、単行本発刊のために、ひとかたならぬお心くばりをいただいた新潮社の桜井信夫氏にあらためて厚く御礼を申しあげたい。